〝上質な木の空間〟に住まう

地産地消に取り組む
大工・工務店 04

株式会社 大山建工

ユーザー訪問

Y 様邸

DATA
八戸市
2023年5月竣工
■延べ床面積／約65坪（約215.3㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、杉（格子、柱、天井、母屋、垂木）、赤松（床、梁、胴差、カウンター）、栗（一部内壁）など。

建築家・前田伸治氏が講演

「木を伐り出すところから始まる〝山と繋がった〟家づくりをしているのは全国でも珍しく、東北では大山建工くらいだ」――㈱大山建工（大山慎司社長）が八戸市内でY様邸の完成見学会（2023年5月）を開催、設計した建築家の前田伸治氏（暮らし十職一級建築士事務所代表）が講演でそう述べた。テーマは「失敗しない家づくり」。満足を得る家づくりをするには、設計に時間をかけることが大事。施主が新しい暮らしに抱く夢を掘り起こして設計に書き込み、その図面を基に、必要な木を伐り出して製材、加工し、大工がじっくりと建てる。「急がないことが失敗しない一番のカギ」だと前田氏は強調した。

床の赤松と柱や天井の杉の風合いが美しく調和するリビング

設計に1年7ヶ月

玄関前に杉の格子が建てられた家屋の佇まいから、どこか懐かしい風情が漂う、その源は、日本建築である。数寄屋の情趣を取り入れて前田氏が設計し、大山の大工衆が熟練の技で建てた〝上質な木の空間〟――Y様邸もその一軒である。

駐車スペースの背後を囲む木塀の表門をくぐれば、庭を通って、その向こう隣に建つY様のご両親の家に通じるようになっているとは、前田氏の講演で知った。建物の間取りをつくることだけが設計ではなく、どのように建物を配置すれば敷地全体を生かすことができるか、そこをまず決め、それから建物の設計に取りかかる。Y様邸の図面を書き上げるまでには1年7ヶ月かかった。設計に時間をかけることがいかに大事か。それはなぜか――を、前田氏は講演で述べた。

前田氏――「建築」は、「図面」に書いた通りにでき上がります。図面に書いていないものが、偶然に現場にできるということは間違ってもありません。図面に書いてある通りに仕上がるものです。ですから、図面の中に、お施主様の新しい家での暮らしに向けた〝夢〟が描けていなければ、でき上がった現場には夢はありません。「ああ、いい空間になったな」と満足することは絶対にありえないのです。

お施主様の夢や要望を掘り起こして図面に書き込む――そのために一番求められるのが、時間です。時間をかけることです。じっくりと時間をかけてお施主様に寄り添うことです。お施主様が例えば「吹き抜けがほしい」と要望されたときに、その背景には何があるのか、子供の頃にそんな吹き抜けのある家に暮らしていたのかもしれない、あるいは子供たちの成長に良い影響があるといわれる高い天井にしたいという親心なのか、そういう思いに寄り添えば、同じ吹き抜けでも、単に天井がないのとは違う、〝思いに裏付けられた〟生きた空間になります。

家は高い買い物であるのに、「失敗した」という声が後を絶たない最大の原因は、「決めるのが早すぎた」ためです。住宅メーカーに図面を依頼し、でき上がった図面を見て、要望が入っているし、担当者も人当たりがいいし、それだけで「いいか」と契約してしまう。その担当者と出会ってからまだ何ヶ月も経っていないのに、です。それでも住んで最初のうちはまだみんな新しいから、ああ良かった、と思うのですが、住んで2、3年も経ってくると、やっぱりこうじゃなかったな、となる。担当者の書いた図面を受け入れるだけではなく、もっと自分たちの暮らしについて主体的に要望を伝えるべきだった、意見を交わすべきだった、と反省ばかりがわいてくる結果になるのです。

私の場合は、設計の要望があ

庭を借景として取り入れたリビングの大開口の窓

開放的なリビング・ダイニングの〝木の空間〟の続きに設けた〝和の空間〟

吹き抜けで1階と繋がる2階の広いセカンドリビング

ると少なくとも書き上げるまでに1年かかります。ここのお宅（Y様邸）は1年7ヶ月かかりました。設計というと間取りを作ることだと考えられがちですが、建物だけでなく、建物の〝内〟も〝外〟も、つまり敷地全体を生かすことが本来の設計で、家づくりで最も大事なポイントです。

Y様邸は、すぐ隣にお施主様のご両親が暮らしている家があります。そこと空間的に繋がるように庭を作り、表門から真っすぐ庭を通ってご両親の家まで行けるようにしました。その途中の、Y様邸のお宅のリビングの外に設けたタイル敷き（7・5畳分）のスペースが、両家族の〝集いの場〟になります。リビングの窓を大きなガラス張りにしたのは、庭を借景として取り入れるためで、庭も生活空間と一体のものです。敷地全体をとらえ、お隣のご両親との交流や、ご両親が住んでいる家の将来にわたる活用なども考慮に入れたうえで、敷地の最適な場所に建物を建てる。そうすることによって建物も庭も、敷地全体が生きるのです。

家のどこにいても家族の気配が感じられる

自分がこれからどんな暮らしをしたいか――。将来の夢を考えるのと併せて、過去の、子供の頃にどんな暮らしをしていたかを思い起こすことも大事です。そういえば昔はリビングじゃなくて畳敷きの茶の間だったな。真ん中に掘りごたつがあって、そこでミカンを食べながら家族みんなで楽しくおしゃべりしたものだったな。そういう生活を子供たちにも伝えていきたい。――そう思って、これは東京・練馬に二世帯住宅を建てたお施主様のお話なんですが、家族みんなが月に一度必ず集まって食事会をしよう、ラーメン一杯でもいい、とそのための和室を設けることにしました。敷地の一番良い場所で、春には庭の桜が眺められる特等席です。同じ屋根の下に住んでいても、月に一度家族が顔を合わせて食事をすることを〝大事〟な行事とする気持ちは、実はお施主様が昔の暮らしで培われたものなんですね。子供のころにそういう暮らしをしていた。両親から子供に与えられる影響の大半はその暮らしにある、と言われますが、まさにそのことが新しく建てる家に反映されたわけです。こういうことは、お施主様に単に「要望は？」と伺っても、きちんとした答えを得られるものではありません。要望を聞いても、たいがいは漠然としているものです。お施主様とのお付き合いを通じて、意識下に隠れている要望を引き出し、形にするので

2階洋室。どの部屋の床も赤松のフローリングが敷かれ、家全体に一体感をもたらしている

ご両親との〝集いの場〟となっているリビングの外のタイル敷きのスペース

す。それが設計の役割であり、だから時間がかかるのです。

〝人任せ〟にしない

前田氏――失敗しないためには、自分がどんな家を望んでいるのかを把握しておかなければなりません。その方法として写真の活用があります。住宅雑誌やホームページで、〝こういう家に住みたい〟と思った写真があったら切り抜くなりピックアップしておくのです。溜まった写真を後で見たときに、それらの写真をなぜ選んだのか、理由が見えてきます。吹き抜けの写真が多いのは、開放的な空間がほしいからだろう。大きな窓の家の写真もそうだろう。無意識のうちに抱いている家への要望の傾向が見えてくる。設計を人任せにするのではなく、要望を自分の内から掘り起こして図面に反映させてもらうことです。

人が建築を造り、建築が人を造る、という言葉があります。建築から人間性がつくられていくという側面が非常に大きい――そんな意味です。子供の頃から住んでいる家が、その人の人格形成に大きな影響を与えます。子供にも家族にも良い影響が伝わるような家を造るんだ、という主体的な意気込みを抱いて取り組んでほしいものです。夫婦ともに忙しいのだから、口で言わなくてもお互いが察しているだろう――それではだめです。

家を建てるということは一生のうちでとても大きなことです。どんな家を建てたいのか、自分の要望をきちんと把握すれば、それを設計するにふさわしい建築家が、建てる工務店が自ずと決まってくるはずです。

（写真提供／大山建工）

真心こめた住まいづくり

株式会社 大山建工

本　　社●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454
本　　部●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
http://ooyamano-ie.jp/
内舟渡常設展示場●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055
盛岡営業所・展示場●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134

庭と家が一体の〝庭屋一如〟

地産地消に取り組む
大工・工務店 05

株式会社 大山建工

「素晴らしい」と「すごい」、とでは、どちらが感動の度合いが深いだろう――。池を中心に「ロ」の字形に平屋を配した数寄屋建築のY様邸。12月10日（2023年）、㈱大山建工が完成見学会を開いた。床面積が約200坪もある建物は、どの角度からも〝正面〟に見えて、〝裏〟がない。一方、建物の内側のどの窓からも日本庭園が眺められる、庭と建築が調和して一体になっている〝庭屋一如（ていおくいちにょ）〟の造り。表玄関から入って正面に水を湛えた池の広がる光景に息を呑み、声が出ないまま、ときおり嘆息と共に見学者からもれる呟きは、「素晴らしい」を超える「すごい」であった。

建物説明会＆完成見学会

ユーザー訪問

Y 様邸

DATA
三沢市
2023年12月竣工（庭園は2024年5月完成予定）
■床面積／平屋建て約200坪（約660㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、杉（柱、母屋、天井板、垂木）、赤松（床、梁、胴差）、欅（柱）、クリ（濡れ縁）。

庭と建築が調和して一体になっている〝庭屋一如〟のＹ様邸（庭の完成は2024年春の予定）

数寄屋でもてなす

「みなさーん、こんにちはー」
マイクを手に椅子から立ち上がった司会者は――ＡＴＶの夕方のワイド番組『わっち』でお馴染みのタレント・先川（せんかわ）栄蔵さん。「私を知っている人は？」と問いかけ、会場のほとんどの手があがったのに気を良くして、「芸能人の中で私が一番好きな人は？」に対しては「あらら……」と、笑いを取って座を和ませた。

数寄屋建築とはどんな建物なのか。一般住宅とどう違うのか。施主はどんな思いで数寄屋建築を要望したのか。一方、工事に当たった大工や板金屋、造園屋の〝造る側〟が勧める〝ここを見てほしい〟ポイントなどを聞いたうえで見学してもらう――そんな趣向だ。

「Ｙ様邸は、着工してから完成まで４年かかりました」と大山慎司社長が振り返った。「建物が大きいから工期がかかった、だけではありません。来客を〝もてなす〟のが数寄屋の心で、見える部分は〝細く軽く〟し、太い木を使って陰で支える――その緻密な造作に手間がかかったのです。例えば、Ｙ様邸のリビングには柱が立っていません。その広い空間を支えているのが、天井裏に何段にも掛けた梁なのです。Ｙ様は本家で、人寄せの機会が多く、来客をおもてなしするのにふさわしい数寄屋建築を選ばれたそうです。これほどの建築は東北でも、東日本でもないでしょう」

棟梁を務めた中里政義氏（令和４年度「現代の名工」受章）が、「ここをぜひ見てほしい」と、スクリーンに映る和室の写真で指した個所が、天井であった。和室３部屋の続き間の天井に使われた杉板。１枚の幅が80㎝、長さが９ｍもある一枚物である。「樹齢２４６年の杉を伐り倒して、加工場（五戸町の大山建工加工場）で製材したものです。めったに見られない、という一枚物の天井板が見通せるように、欄間を付けず、仕切りの上部をあけた造りにしているのだそうだ。

「１本建てるのに１日かかりました」とは細越克憲大工。中里棟梁の一番弟子だ。柱の丸太と、屋根の軒を支える桁の丸太との接合部を、寸分の隙間なくぴたりと納める。１日がかりで立てた柱が何本もあるのだ。建

司会の先川栄蔵さん

一枚物の天井板が見通せる3間続きの和室

築の美しさは技と手間で引き出されるのを実感する。

数寄屋建築では、平らに見える屋根も実は線が柔らかく見えるように、ゆるやかな曲がりを付けている。これが〝むくり〟で、板金屋の腕の見せ所だ。曲面と曲面との取り合いの〝谷〟をいかにきれいに納めるか。「職人は〝難しい〟という言葉を言っちゃいけません」と㈲遠藤板金工業（おいらせ町）の遠藤正市社長が気概を見せた。

「在庫の木を全部使いました」とは、庭園づくりに追い込みをかけている㈱鈴木造園（五戸町）の庭師・苫米地研大さん。「1軒の住宅の庭づくりで会社の木が空になったのは初めてです」と興奮気味に語った。

20人1組となり、間隔をあけて6組が順にY様邸を見学した。中央の池が〝水鏡〟となって、そこに映る名月を四方の廊下から愛でる平安時代の風情を再現させた設計。話し声もなく、静かな見学会であった。息を呑むばかりなのだ。飴色に光る廊下は赤松。目が詰まった美しい柱は杉。褐色の木肌は欅。北山杉を除き木材はすべて青森県産材で、建てたのは地元の大工たち。「地元にはこんなに立派な木があるし、数寄屋建築を建てられる大工がいる」――その集大成がY様邸である。

「いかがでしたか？」と一巡して表玄関に戻ってきた見学者に大山重則会長が声をかけた。夫婦らしい2人連れの男性が答えた。「すごい家を見させてもらいました」。隣で女性も頷きながら、「すごかったです」

「青森の木はいい」

NPO法人あおもりの木で支える「伝統と技術」の会　大山重則理事長

11月2日（2023年）に開催された第52回青森県職業能力開発促進大会を記念し、大山重則理事長（NPO法人あおもりの木で支える「伝統と技術」の会）は、「県産木材の活用と職人の技術伝承」をテーマに講演した。その中で大山理事長が熱く語ったのは、「青森の木の良さ」であった。「青森の木はいい」「いい木が一杯ある」「樹種も豊富」「中でも赤松とクリは、国内ではもはや青森県の県南の山からしか採れない」と。かつてはチップにしかならなかった曲がりある南部赤松を八角の丸太梁にして組む伝統工法と、数寄屋建築の情趣とが融合した『大山の家』を全国各地に展開してきた。その都度、現地から「青森の木はいい」「建てた大工の技術も素晴らしい」と上々の

講演する大山理事長

評価を得てきた。

大山理事長は25歳で㈱大山建工を創業して以来、「ものづくりが好きで突き進んできた44年間」を、東京や京都、九州などに建ててきた建築をスライドで紹介しながら振り返った。促進大会で表彰されたものづくりの受賞者たちと、青森県立弘前高等技術専門校の生徒らが受講した。

茶室の建築を依頼されたのがきっかけで大山理事長は京都を訪ね、数寄屋建築を学んでいく。〝質素な造り〟が数寄屋建築の原点だ。表面を飾らず、質素な美しさを見せて、それを陰で支える。「これもそうです」と大山理事長がスライドを映したのは千葉の現場。日本庭園を眺め渡せるように窓を大きくして柱を少なくし、張り出した庇に長さ11mの丸太桁を1本渡している。実はその陰で、柱と桁に負荷がかからないよう屋根裏に「拮木（はねぎ）」を差し入れて荷重を分散させているのだ。陰で支えて〝軽々とした風貌〟を表現するところが数寄屋の骨頂である。

「日々勉強」「日々努力」「心」――44年間のものづくり人生において大山理事長が大事にしてきたのがこの3つ。このうち「心」について、こう話す。

「技術だけが優れていても〝棟梁〟にはなれません。建築はいろんな職種が集まるだけに、一つにまとめなければ現場は仕上がらない。まとめる力は、人間として心を磨かないと備わりません。技と心が身に付いてこそ棟梁になれるのです」

ぜひ高みを目指してほしいと、建築の道を目指す訓練校生にエールを贈った。

真心こめた住まいづくり

株式会社 大山建工

本　　社●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454
本　　部●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
http://ooyamano-ie.jp/
内舟渡常設展示場●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055
盛岡営業所・展示場●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134